

<b>Title</b>	一臨床医のナラティブ（スピリチュアル・ケア研究講演会）
<b>Author(s)</b>	中村, 準一
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-No.5 : 6-6
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2897">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2897</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## スピリチュアル・ケア研究講演会 —臨床医のナラティブ

2010年11月19日(金)、新都心ビジネス交流プラザ4階会議室にてスピリチュアル・ケア研究室講演会が行われた。講師に西野洋(安房地域医療センターメディカルディレクター)氏をお迎えし、氏がスピリチュアル・ケアに取り組むきっかけとなったワークショップでの体験を中心に講演していただいた。概要は以下の通りである。

母親の死を機に夫人と友人のキャロル・サック氏(リラ・プレカリア〈祈りの豎琴〉—ハープと唄と祈りで亡くなる人に寄り添う—というプログラムを主催)の勧めで、アメリカで催されたスピリチュアル・ケアのワークショップ(オレゴン州にあるSacred Art of Livingという施設で開催)に参加したことが、西野氏が患者の心(=魂)のケアの問題に深い関心を寄せる端緒となった。

ワークショップは参加に当たって年4回1週間の研修に加え、地元での毎月の例会と研修での学びを活かした社会への奉仕活動が課せられる非常によく構成されたプログラムとなっていた。西野氏にとって全てが初めての経験となるスピリチュアル・ケアの研修は困惑を伴うものであったが、夫人や仲間との交流に支えられながら総じて人格的な成長を促す多くの気づきを得ることができた場となった。

西野氏は、内観・瞑想の訓練を通じて、自らが潜在的に抱える〈スピリチュアル・ペイン〉(「意味・関係性・救済・希望」という4つの痛みに分類される)を自覚し、「痛みに向き合う」ことの大切さを認識した。また、西野医師は、神経内科の医師として、とりわけ治療の難しい病が多く、薬の実質的な効用も未知数とされる状況の中で患者と向き合っていた。そこで、患者に寄り添うことで「医者自身が薬になる」という同ワークショップに参加していたある医師の言葉は、患者と対話を通して患者の病気をその社会的コンテキストから理解し、抱える問題に対して全人的(身体的、精神・心理的、社会的)なアプローチをとることの重要

性を改めて認識させる心に残る言葉であったと西野氏は語る。特にALS(筋萎縮性側索硬化症)を患った患者に初歩的なスピリチュアル・ケアを実践したところ、患者が満ち足りた最期を迎えることができたことを遺族に感謝され、患者・遺族と医師自身の双方に何か暖かいものが心に残ったという経験を。さらに、二度目のワークショップでは、ある神秘的な体験を機にキリスト教に入信することとなった。こうした体験によってスピリチュアル・ケアの重要性を確信した西野氏は、以後病院内でもスピリチュアル・ケアを積極的に紹介し、また研修教育に導入するようにもなった。

近年、〈根拠に基づいた医療〉(Evidence Based Medicine)、すなわち客観的な根拠にもとづいて行う医療が医療体制の主流となってきたが、そうした統計学的方法の限界を補完する形——もっぱら客観的なデータと技術とで支えられる科学としての医学と人間同士の触れ合いのギャップを埋めるという意味においても——で〈物語(対話)に基づいた医療〉(Narrative Based Medicine)という方法が提唱され重視されるようになった。患者と医療とのパートナーシップによって改善の方向を探るとするのが医療の現代的傾向であるとすれば、今回の西野氏の講演はそうした動向に親和的な手法としてのスピリチュアル・ケアの妥当性を提案すると同時に、また医学という科学的な領域にスピリチュアルという霊的なものがどう関わるかについての示唆を与える大変興味深い内容であった。

(文責：なかむら・じゅんいち 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程)

(2010年11月19日、新都心ビジネス交流プラザ4階会議室)